

『全一道人』の三濁点について

関 丙 燦

0. はじめに

江戸期を通じて中国語や韓語を仮名で転写もしくは翻字した資料は少なくない。韓語の学習書として作られ、韓語を仮名で転写した資料である雨森芳洲(1688-1755)自筆稿本『全一道人』¹⁾(1729)もその一つである。

この『全一道人』と、芳洲から何らかの影響を受けた者によると推定される『物名』²⁾(18世紀末か)とは、韓語を転写した片仮名の右上に二点を施したもの—以下濁点と呼ぶ—と、三点を施したもの—以下三濁点と呼び「ハ*、サ*」のように示す—、そして何の符号も加えられていないいわば清音仮名—無濁点と呼ぶ—とが用いられている。『全一道人』の本文の構成については後述するが、本稿で主として注目する三濁点は日本語訳の部分には用いられておらず、ただ韓語の仮名転写の部分にのみ現れる。この事実は三濁点が通常の仮名では書き表すことのできない韓語の音に対する、一種の標識もしくは注意点であることを物語っていると考えられる。

本稿は、『全一道人』に見られるこの三濁点を取り上げ、濁点・無濁点との比較、及び『物名』をはじめとする他資料との対照などを通してその機能を明らかにし、それが付された仮名が限定されていること、すなわち「ハ*、ヒ*、フ*、ヘ*、ホ*」、「サ*、テ*、ソ*」のように分布する経緯の解明を試みるものである。なお、日本における韓語の仮名転写の原点³⁾とでも言うべき『全一道人』の転写法の一特徴を明らかにすることは、日本における韓語受容の歩みを探る上では不可欠のものと考えられる。

1. 『全一道人』の転写傾向

『全一道人』の内容は中国明代の劇作家汪延訥著の教訓書『勸懲故事』の一部とほぼ一致する⁴⁾。その本文は、『勸懲故事』の漢文を漢字仮名交じりの日本語に訳した部分と、韓語訳を片仮名転写した部分とからなる。そして片仮名転写した部分の右側には、安田(注1文献)が「振り諺文」としているハングルが随所に書き加えられている。以下、本稿で取り上げる『全一道人』の用例は基本的には「振り諺文」を有するものに限る。

『全一道人』の序の後、本文の前には、「此書日本かなにて朝鮮言葉をしるし」と始まる凡例が載せられている。芳洲が凡例で述べているのは、韓語の音節結合における規則、韓語の同音異義語、日本人の仮名遣いの問題、韓語の習得法などである。それらの中で特に注目されるのは、最初の韓語の音節結合における規則についての言及である。

韓語の内 諺文にてかけると言葉にいへるとはちかひたる事おし 大葉其例を後

に記せり これを以て類推すへきにや（後略）

このように述べた後、48項目の例を掲げている。本稿では、それが韓語のどのような音節結合規則に関わるものであるか、はっきりと判断できる例に限って整理を試みたい⁵⁾。

①音節末子音 [n] の [l] 化（次音節の頭子音が [r] の場合）

han-rim 翰林 ハル^リリム man-ri 萬里 マル^リリ など

②音節末子音 [l] の脱落

ma-l-syo 馬牛 モ^シヨ hoal-sal 弓箭 ハ^サル など

③ [h] の脱落に伴うリエゾン

sim-hj 甚 シ^ミ c'in-hj 親 チ^ニ など

④リエゾン

son-'i-ra ソ^ニラ kən-'i-ni コ^ニニ など

ここに取り上げた凡例の一部を見ても、雨森芳洲が韓語における音節結合規則を十分理解した上で、その転写を試みていたことが分かる。これは、その転写が韓語の実際の音声を重視したものであることを物語るものと考えられる。このような『全一道人』の転写傾向は、江戸後期の韻書にみられる韓語の機械的翻字⁶⁾とは明らかに違うものであると言えるであろう。

さて、凡例には掲げられていないが、韓語の有声音化及び有気・無気音の対立に関してはどのような転写がなされているのかを見てみたい。まず、『全一道人』における濁点が付された仮名の分布を調べてみると、韓語の有声音化した無声音の部分にそれが用いられている場合が多い⁷⁾。この事実をみると、濁点によって韓語の有声音化を表記しようとしていたものと考えられる。ハングルでは表記されない有声音化が『全一道人』で積極的に表記されているのは、日本語に有声・無声の対立があることを反映するものにほかならない。

一方、有気・無気の対立に関しては、次の表1で見ると、その書き分けが認められない。有気である「p`」に対して八行の三濁点字が用いられる割合が高いものの、無

表1

無気	語	頭	語	中	有気	語	頭	語	中
p	ハ*	71/77	バ行	16/30	p`	ハ*	14/14	ハ*	12/14
	バ	6	ハ*	13		ハ	1	ハ	1
			ハ	1		ビ	1		
t	タ	77/79	タ	64/78	t`	タ	12/13	タ	13/16
	ダ	2	ダ	14		テ*	1	テ*	3
k	カ	121/122	カ	86/100	k`	カ	6/6	カ	3/4
	ガ	1	ガ	14		ゴ	1		

（表の中のたとえば3/4のような数字は前者が該当例数、後者が総例数である）

気の「p」にも同じ転写法が見られるので、三濁点の有気の標識とは考えられない。といって韓語の有気音字に全て「振り諺文」が加えられているわけでもなく、芳洲の仮名転写を見る限り、有気・無気音の対立は表記しない方針であったか、それとも表記できなかったかのいずれかであると判断される。

日本語は本来無気音と有気音を区別しない言語である。そこで、中古漢語におけるその対立も、日本字音では一切無視された。このような習慣が強くはたらいて、外国語として韓語を習得する段階では当然意識されたに違いないこの区別も、『全一道人』の片仮名表記の上には現れて来なかったのではないかと判断される。前述した、凡例に見られる音声を重視した的確な転写方針や、濁点による韓語の有声音化の積極的な表記とは異なる一面が見うけられる。

2. 『全一道人』における三濁点の分布

上述のような転写傾向の中にあって、三濁点は特異な振る舞いを見せる表記として注目される。『全一道人』を通して三濁点字があてられているハングルの分布を調べてみると、次の表2のようである。

表2で見るように、三濁点に加えられた仮名は「サ、ソ、テ」と「ハ」行とに分布している。そしてそれが対応するハングルは主に「c、c`」と「p、p`」とである。

有気・無気音に関しては前述したように『全一道人』を通してその書き分けが認められないので、「c」と「c`」及び「p」と「p`」に等しく三濁点字があてられていることは問題にはならない。そこで、その分布にみられる別の特徴に目を向けた場合、三濁点字があてられている韓語が、おおむね歯茎破擦音 ts と両唇破裂音 p とに限られていることが分かる⁸⁾。すなわち、『全一道人』では「サ*、テ*、ソ*」によって韓語の歯茎破擦音 ts

表 2

	語 頭			語 中			語 頭			語 中		
	c	c`	t`	c	c`	t`	p	p`	sp	p	p`	sp
サ*	7	13		6	7							
ソ*	24	8		8	9							
テ*	19	13	1	11	8	3						
ハ*							23	4	1	5	3	
ヒ*							7	3		2	3	
フ*							35	1		3	8	1
ヘ*							1	4		2	0	
ホ*							10	1	2	4	0	

が、そして「ハ*、ヒ*、フ*、ヘ*、ホ*」によって韓語の両唇破裂音 p が転写されている。以下、三濁点に関わるいくつかの問題点について述べてみたい。

3. 三濁点の背景

仮名の右上に三点がほどこされた日本の資料については、濁点の定着の過程における四点から二点への変遷の途中の過渡期的な異表記としてとらえるのが一般的であるようである⁹⁾。山田（注9論文）は、『日蓮聖人註画讃』など三濁点が施された資料を取り上げ、

これらの三点資料すべてにわたっていへることは、一旦筆録した言語に対して分析的な反省をくはへた文献乃至なにほどこききかぎ的性格をもつ文献に附随してゐるといふ事実である

としている。『全一道人』が外国語学習書である以上は韓語に対する何らかの分析的な反省が加えられたに違いないことと、そして前述したように音声を重視する転写傾向が認められることとに鑑みて注目に値する指摘である。ところが、『三河物語』『日蓮聖人註画讃』等で濁点の異表記として用いられた三点仮名と、『全一道人』のそれとは明らかにその機能を異にしている。なぜなら『全一道人』では1. で述べた通りの機能を持っている濁点がある一方で、三濁点も用いられているからである。

さて、三濁点とは違うが、いわゆる唐音資料に「°」によって中国語の特異な音を転写したものがある。奥村¹⁰⁾は、「天和三年黄檗版観音經」における「°」を「注意点」と位置づけ、その用法を次のように述べている。「①パ、ピ等は、半濁音を示すのか②ト°は [tu] 音を表すのか③テ° は、多くの場合、[ti] 音を表すのか④イ° キ° シ° 等は、[-y] 音を表すのか」等と。更に、黄檗版では「ツア、ツエ、ツヲ」によって [tsa] [tse] [tso] を表しているのに対し、貝葉書院版ではこれらを「宰 サ° イ」「作 ソ°」等のように表記する機会が多いことを明らかにしている。

一方、芳洲と交流があった人物の中に当代の華音通として有名な岡島冠山(1674-1728)がいる¹¹⁾。その著『唐話纂要』(1726刊)にも、「パ、サ°、モ°、ケ°」のような「°」表記が見える。沼本¹²⁾は、ここに用いられる「°」は p 音、ts 音、-ə 音を表わすための「注意記号」としてしている。いわゆる唐音資料と『全一道人』とは、芳洲の中国語学習の経験¹³⁾や、両書ともほぼ同時代の、外国語の学習書といった共通の目的をもっている資料であることなどから、深い関わりが想像される。この問題については、まだ十分述べるほどの準備がないので、今後改めて考察する機会を得たい。ただ、『全一道人』の三濁点と唐音資料の「°」とに見られるように、通常の仮名では表記できない外国語の音に対して、仮名をいろいろ組み合わせてみたり、小さい仮名を用いるのとは異なり、当時は通例何らかの音符を加える方法が採られたのではないかと思われることだけは指摘しておきたい。

4. 「ハ*」行

『全一道人』を通してハ行の三濁点字が韓語の p 音を転写するのに用いられていることは前述した通りである。いわゆる半濁音符の表記が現在のように「°」として定着した経緯については、様々な議論がなされている¹⁴⁾。「°」は室町時代のキリシタン資料に散見し、江戸期の唐音資料等に広く認められ、室町末から江戸中期を通じて次第に一般化したといわれる。ただしその過程においてその使用方法にはかなりのゆれがあったようである¹⁵⁾。このような、両唇破裂音の表記が必ずしも一定していないということの中に、三濁点が用いられうる余地があったのではないであろうか。

『全一道人』とほぼ同時代の韓語の仮名転写資料には、『陰徳記』(1660以前)、『和漢三才圖會』(1719年)、『朝鮮物語』(1750年)、そして『物名』がある。一方、その時代、日本語をハングルで転写した朝鮮側の日本語学習書はいくつかあるが、その中で『倭語類解』(18世紀初)には芳洲の関与が認められる¹⁶⁾。そこで、以下適宜参照していく。

これらの資料間において、韓語の同一語の仮名表記と判断されるものを調べたのが次の表3である。

ここに見るように、『全一道人』及び『物名』と『陰徳記』以下の文献とを比べてみると、p 音の転写に、「*」は「°」、または「°」と対応している。

『全一道人』のハ行の三濁点はハ行の全段にわたって分布している。そしてそれがあてられた韓語の頭子音は両唇破裂音 p である。また『全一道人』で三濁点が施されている語は『和漢三才圖會』等の他資料で「°」が施された語と対応している。これらの事実と、江戸時代から今日まで半濁音符が「°」であることを総合してみると、現在からみれば「*」は「°」の異表記であると考えるのが妥当であろう。ただし、『全一道人』を通して日本語訳の部分には三濁点の用例が見られないこと、また一方、濁点はごく普通に施されていることからすると、この三濁点が半濁音符として用いられたとは必ずしも言えない。つまり、韓語の、即ち外国語の特定の音に対する工夫の結果を示しているだけでと解釈すべきかも知れない。いずれせよ、前述した唐音資料との関わりに鑑みて、

表 3

	全一道人	物 名 ¹⁷⁾	陰徳記	和漢三才	朝鮮物語	倭語類解
風	ハ*ラム	ハ*ア。ラム。		ばらん	ばらみ	pa-rām
雨	ヒ*	ヒ*。		び	び	pi
海	ハ*タ	ハ*ア。タア。		はたく	はたく	pa-ta
火	フ*ル		フリ	ふる	ふる	
飯	ハ*ブ			ばび	はび	
船	ハ*イ	ハ*イ。	バイ	ばい	ばい	pai
扇	フ*ツサ*イ			ぶつぞい	ぶつそい	

なぜ「°」を用いず、あえて三濁点を用いたのかという問題は残される。

5. 「サ*・テ*・ソ*」

表2で見たように「サ*、テ*、ソ*」があてられた韓語は歯茎破擦音 ts である。ところで、韓語の歯茎破擦音は『全一道人』の中ではその他どのような仮名で転写されているのであろうか。それを知るためにここでは逆に、韓語の歯茎破擦音に対してどのような仮名が用いられているのかを具体的に見てみたい。

表4で見ると、韓語の歯茎破擦音を転写するには「サ*、チ、ツ、テ*、ソ*」が用いられている。

ここでは大きく分ければ次のような二つの疑問が生じる。まず、「サ、テ、ソ」には三濁点が加えられており、「チ、ツ」にはそれが無いのはなぜであろうか。それから三濁点に加えられた仮名が「サ・ソ」及び「テ」といったように、「サ・タ」二行にわたっているのはなぜであろうか。「チ・ツ」及び「テ*」については後述することにし、まず「サ*、

表4

	c (語頭)	c (語中)	c` (語頭)	c` (語中)
-a	サ*5/5	ザ8/12 サ*4	サ*3/3	サ*2/4 ザ1 ソ*1
-ə	ソ*6/7、サ*1	ソ*3/3		ザ1/2 ソ*1
-o	ソ*5/5	ゾ1/1	ソ*1/1	ソ*2/5ゾ・ツ・ツ1
-u	ツ20/20	ヅ1/2 ツ1		
-w		ツ5/6 ツ1		ツ2/2
-i	チ11/11	チ35/42 チ7	チ7/7	チ4/4
-əi	ソ*イ2/2	ゾイ1/2 サ*イ1		
-ya	チャ2/2			
-yə	テ*17/18 テ1	テ*7/15チヨ4テ・チヨ・チャ・ゼ1	テ*8/8	テ*6/9 チヨ3
-yo	チヨ1/1	ヂヨ1/1		
-yu	チュ4/4	チュ2/3 チユ1	チュ2/2	
-yəi	テ*1/3テ*イ1チヨ1	テ*イ1/2 ゼイ1	テ*3/3	テ*1/1
-oa	サ*2/2			
-oi	ソ*イ3/3		ソ*イ1/1	
-ʌ	ソ*9/9	ソ*2/6ザ・ゾ・ツ・ヅ1	サ*6/11 ソ*5	ソ*4/6 ツ2
-ai		ゾイ2/2	サ*1/2 サ*イ1	サ*イ1/1

ソ*」が用いられた経緯について考えてみたい。

5.1 「サ・ソ*」

前述したように『唐話算要』等の唐音資料では、p音を表すための補助符号と同じもの、即ち「°」を「サ、ソ」に施して、中国語のts音を表している。一方、キリシタン資料の『耶蘇教写経』には、/ti//di//tu//du/音を表すために用いられた「ち°」「つ°」のような表記がある¹⁸⁾。このような事実から、通常の仮名では表記できない特殊な音に対しては、p音を表すための補助符号を用いるのが、当時の一般的な傾向であると仮定することができないであろうか。もしこの仮定が許されるなら、『全一道人』においてP音をあらわす三濁点をts音の転写にも援用したことになる。こうしてみると『全一道人』の「サ・ソ」に施された三濁点は、当時の外国語の特殊な音に対する仮名表記法の通例を物語るものであるかも知れない。この仮定が妥当か否かを確かめるには、外国語の特殊な音の転写法についてのより幅広い検討が必要であるが、残念ながら今後の課題とせざるをえない。

それはともかく、韓語の歯茎破擦音tsを転写するのに、必ずしも「タ*、ト*」でなく「サ*、ソ*」を用いるべき蓋然性があるとは主張できない。後続母音が/-a、-e、-o/の場合、破擦音字を持たない日本語において、韓語の破擦音を書き表すためには必ず破裂音字でなく摩擦音字を用いるべきなどという決まりがあるとは考えられないからである。唐音資料の「サ°」の例があるものの、『全一道人』で「サ、ソ」に三濁点を加えられた経緯の積極的な説明にはならない。この問題は、6で改めて述べたい。

5.2 「チ・ツ・テ*」

『全一道人』において韓語の歯茎破擦音を転写した仮名は、「サ*、チ、ツ、テ*、ソ*」と分布していて、それが一貫性に欠けていることがすぐ分かる。すなわち「サ*、ソ*」が用いられているので、「セ*」の使用が期待されるのにもかかわらず、「テ*」が用いられているのはなぜであろうか。

ここでは芳洲が韓語の歯茎破擦音を転写する際、次のような二つの作業手順に従ったという仮説を立ててみたい。<三濁点を加えることを基本としながら、①その音を表す仮名は破擦音であること、②その仮名は歯茎音であること、を仮名選択の原則としていた。>

表 5

	歯 茎	口 蓋
破裂音	タ テ ト	
摩擦音	サ ス セ ソ	シ
破擦音	ツ	チ

この仮説をもとに、当時のサ行頭子音の音価の問題から解決の糸口を探りたい。

現代日本語のサ行・タ行音は表5のように分布している¹⁹⁾。

韓語の ts 音を転写するにおいて、仮説①その音を表す仮名は破擦音であることに従うと、まずは、当然破擦音である「ツ、チ」が選ばれることになるはずである。しかし、後続母音/-a、-e、-o/を伴う韓語の破擦音を表すのには適当な字がない。そこで、仮説②その仮名は歯茎音であることといった原則のもと、「*」を加える工夫が試みられたとすると、「サ*、ソ*」を用いるのなら、後は「セ*」の使用が予想される。ところが、『全一道人』では「セ*」ではなく「テ*」が用いられている。これがここでとりあげる問題である。

まず考えられるのは、芳洲の「セ」が現在のように歯茎音であったかということである。キリシタン資料では、「セ」が「Xe」と書かれ、その音価は [je] と推定されている²⁰⁾。更に奥村²¹⁾によると、現在も九州や奥羽地方を主体とし、近畿の滋賀や三重地方にも [je] が認められるようである。

キリシタン資料の教えることや、芳洲の出生地が滋賀県であること、そして芳洲が主に活躍したのが対馬であること等を総合してみると、芳洲の「セ」の音価は現在とは違ったものであった可能性が強い。つまり、それは現在のような歯茎摩擦音ではなく、口蓋化した摩擦音として実現していた可能性が強いということである。このように口蓋音としての「セ」を想定すると、母音/-e/をもつ歯茎音字で韓語の ts 音を転写するのに利用できる仮名は、「テ」だけが残る。こうしてみると、歯茎音を転写するのに口蓋音の「セ」を用いることができず、破裂音であるにもかかわらず、「テ」に三濁点を加える転写法が選択されたのではないかと推論することができる。また、『全一道人』を通してその用例は少ないものの、韓語の [je] にあたる「syøi」を「セ」で転写していることも、このような推論を支持する一例であるのではないかと考えられる²²⁾。

遠藤²³⁾は、新たに仮名が考案される理由について述べる中で、

それ独自の仮名をもたないで、何らかの補助的符号を付けることによって考案された仮名は、その出自においては、基幹となる仮名と類音関係にあったものなのである

としている。芳洲にとって「セ*」の使用も十分選択可能な転写法であったと想像されるが、その基幹となる「セ」の音価が問題となって、後続母音/-e/を持つ韓語の歯茎破擦音の転写に「テ*」を使わざるをえなかったのではないかと考えられる。

6. 「ハ*」行と「サ*・テ*・ソ*」

ここでは前述したことを踏まえ、「サ、テ、ソ」及び「ハ行」の三濁点全般にわたって言えることはどのようなことであるのかを考えてみたい。

日本語のハ行子音の音価については様々な議論がなされている。本稿でそこまで触れることはしないが、雨森芳洲の活躍した時期的・地域的背景に鑑みて、ハ行子音が両唇摩擦音 [ɸ] として実現していた可能性を想像するのはそう難しくない。こうしてみると

「ハ行」と「サ行」とでは摩擦音であることで共通する。ここに5.1で留保した、韓語の破擦音の転写に「タ*、ト*」でなく「サ*、ソ*」を用いた理由があるのではないであろうか。つまり、三濁点は摩擦音に閉鎖を加えることを指示する、一種の注意点としての役割を持っていたのではないかという推論である。このように考えると、韓語の ts 音を表すのには、「サ*、ソ*」「チ、ツ」、そして5.2で述べた理由で「テ*」が、最も的確なものであるようにみられる。『全一道人』の凡例にみられる音声を重視する転写方針が、ここにも認められるのではないかと考えられる。

7. おわりに

以上、『全一道人』に見られる三濁点に注目して、その機能及び、その使用経緯について検討してみた。

その結果、「ハ*、ヒ*、フ*、ヘ*、ホ*」は韓語の両唇破裂音を転写したもので、そこに用いられている三濁点は「^o」の異表記と考えられること、そして、「サ*、テ*、ソ*」は韓語の歯茎破擦音を転写するために工夫した表記であることを明らかにした。更に、韓語の ts 音の転写に「サ」と「タ」の二行にわたって三濁点が使用されているのは、芳洲の「セ」及び「ハ行」の音価にその理由があったのではないかという推論を述べた。

本稿で取り上げた三濁点のような特殊な目的のために考案された表記法が、文字として定着することはもちろんなかったが、『物名』にその表記例が見られるので、韓語の学習の世界においてはある程度まで通用していたのではないかと想像される。これに比べて、日本漢字音の記述のため便宜的に韓語を利用した江戸後期の全齊(1759-1829)等の学者達にとっては、彼等が芳洲の転写法から何らかの影響を受けた可能性は十分想像できるものの、三濁点のようなより音声に忠実な表記法は余剰的なものと考えられたであろう。

ここに至って芳洲と江戸後期の韻学との関わりをあえて書き加えたのは、本稿を、日本における韓語受容の歩みを探ろうとする、今後の自らの研究の出発点としたいからである。

注

- 1) 『全一道人』の書誌的、資料的研究は安田章(1964)「全一道人の研究」(『全一道人の研究』所収)に詳しい。本研究は、安田の複製した本文による。
- 2) 『物名』は李康民(1993)「対馬宗家所蔵の『物名』について」(『朝鮮学報』148)によって学会に紹介されたもので、書誌的・資料的研究はそれに詳しい。『物名』は短文21項目を含め総486項目の日本語が見出し語として掲げられており、それに対する韓語が片仮名で転写された形で載せられている。いわば語彙集と言えるであろう。なお、芳洲との関連は後述する『倭語類解』を媒介とした語彙選択及び表記の面で著しい。
- 3) 周知のように雨森芳洲は江戸期唯一の韓語会話能力を有する学者であった。『全一道人』以前にも『陰徳記』(1660以前)『和漢三才圖會』(1719年)など、韓語を仮名で転写した資料があるものの、その著者の韓語力がどの程度であったか不明である。またそれらの書は韓語の学習書ではない。韓語を仮名で転写した学習書として『全一道人』は最古のものに属する。なお芳洲の名は、江戸後期の韻書で、

朝鮮漢字音を参照している『音韻考証』(1862成)にも見られ、その影響力の大きさが窺われる。

- 4) 神田喜一郎(1949)「朝鮮と雨森芳洲」(『世界人』第7号)及び、安田(注1文献)
- 5) ハングルのローマ字表記は、河野六郎(1955)「朝鮮語」(『世界言語概説 下』)に準ずる。
- 6) たとえば『漢呉音図』の韓語の仮名表記の不適切さについては、既に満田新造(1921)「漢呉音図の解剖的批判」上(『東洋学報』11-2)で詳しく論じられている。
- 7) 濁点は語頭に使われる場合と語中に使われる場合とがあってその用法を異にしている。まず、語頭では「フス」のように韓語の濃音をあらわすための一つの工夫として用いられている。そして語中では韓語の有声音化した無声子音を表すのに多く使われており、それに加えて有声韻尾をあらわすのにも用いられている。以下は有声音化に関する例である。ここに掲げた例は、まず韓語の仮名転写、そして日本語訳部、ハングル部、底本とされる『勸懲故事』の該当部、安田(注1文献)の複製した本文のページの順である。

・ホンヅ	ひとり	hon-ɕa	獨	(p33)
・ハンヅリ	一月	tɕA-l'i	月	(p56)
・トウソイバン	再三	tu-sai-pən	再三	(p26)
・アピ	父	'a-pi	父	(p18)
- 8) 以下、韓語の ts 音及び p 音という時には、有気・無気の区別は問わず、それぞれ歯茎破擦音と両唇破擦音を指すものとする。
- 9) 星加宗一(1932)「濁点の成立について」(『国語と国文学』9)、中田祝夫・林史典(1970)「国語史料三河物語のために」(『原本 三河物語 研究・釈文篇』所収)、山田忠雄(1971)「黒川本 日蓮聖人註画讃の写音法」(『国語学』84)など
- 10) 奥村三雄(1972)「天和三年黄葉版観音經一近世初期の表記・音韻史料として一」(『近代語研究』第三集 所収)
- 11) たとえば、中村幸彦(1982)「雨森芳洲とその交友」(『中村幸彦著述集』第11巻)
- 12) 沼本克明(1990)「半濁音符史上における唐音資料の位置」(『国語学』162)
- 13) 上野日出刀(1991)『日本の思想家⑦』「木下順庵・雨森芳洲」によると、「芳洲先生文抄」(『音読要訣』)には、「私は二十三歳で、初めて唐話を心越禪師門下の白足惠嚴に学んだ。二十六歳のとき長崎に行き、上野玄貞の教えを受け、以来今まで五十余年になる」との記事がある。一方、雨森芳洲が韓語を学んだのは「詞稽古之者位立記録」(『芳洲外交関係資料書翰集』雨森芳洲全書三 1982 所収)によれば35歳以降のことである。
- 14) 福島邦道(1973)『キリシタン資料と国語研究』第九章半濁音符、沼本(注12論文)など
- 15) 坂梨隆三(1987)『江戸時代の国語 上方語』「文字・表記」及び、沼本(注12論文)などによると、17・18世紀頃 p 音の表記は一定しておらず、たとえば天理図書館本狂言六義(1624-1643写)などでは「ㅍ」、キリシタン刊行の『落葉集』(1598)『片言』(1650刊)などでは「ㅍ」、『仮名鑑』(1626写)では「ㅍ」、そして『音曲玉淵集』(1727刊)ではまたそれ独自の符号をもって p 音を表している。
- 16) 『通文館志』巻七人物條の「倭語類解」の著者洪舜明についての記事の中に雨森芳洲の名が見える。洪舜明、字水鏡、喜男之會孫也、旧例対馬島酋家臣、有書契而自称宰臣、薛甚傲慢、康熙辛巳公承朝命、實論仍革其家臣書契、草梁民居数百、與倭館相接、奸弊日滋、己丑公力陣于廟堂、撤民舍、築城以界之、邊禁始肅、倭語比諸方最難曉、公質于日本人雨森東、作長語及類解等書、用於課試、(後略)
- 17) 『物名』に見られる「ㅍ」は韓語を一音節毎に分けて表記した結果であり、句点の位置に施されている。
- 18) 福島 注14論文
- 19) 馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院など
- 20) 馬淵 注19書など
- 21) 奥村三雄(1982)「サ行の発音はどのように推移したか」(『国文学』学燈社27-16)
- 22) なお、『捷解新語』『倭語類解』などの朝鮮側の日本語学習書でも、仮名「セ」をハングル「syoi」で表記している。
- 23) 遠藤邦基(1978)「中世末期のパ行音」(『論集3 中世』)

付記

本稿は1995年度に開催された筑波大学国語国文学会での研究発表を修正・補筆したものである。本稿をまとめるにあたり、終始きめ細かくご指導くださった湯沢質幸先生に、記して深謝申し上げる。

(ミン ビョンチャン 筑波大学大学院 博士課程文芸・言語研究科 応用言語学)